

爬虫類の喉頭軟骨の比較解剖

野首和人, 木村 勝, 村木 毅, 鈴木卓朗, 加藤守男
(東邦大・医・解剖)

Comparative anatomy of the laryngeal cartilages
in Reptilia

KAZUTO NOKUBI, MASARU KIMURA, TAKESHI
MURAKI, TAKURŌ SUZUKI, MORIO KATO

喉頭軟骨の系統発生を目的で, 爬虫類の喉頭軟骨の形態ならびにその結合様式, 基質等について観察した。観察は Anapsida の ニホンインガメ・ニシキガメ・スッポン・アカウミガメ・ギリシャリクガメ (潜頸亜目), テレケイヨコクビガメ (曲頸亜目), Lepiosauria のイグアナ・キノボリトカゲ・カメレオン・ヤモリ・トカゲ・カナヘビ・アオジタトカゲ・ヤマカガシ・アオダイショウ・マムシ・コーンスネーク, Archosauria のメガネカイマンについて行い, 各喉頭を Bouin 固定しパラフィン包埋した後薄切し, elastica van Gieson 染色を施して存在する喉頭軟骨について検索した。

爬虫類の喉頭はいずれも喉頭前庭の部分のみからなり, 喉頭腔や声帯は認められず真ちに気管に続いている。また喉頭の主要構成である軟骨は, 1対の披裂軟骨と1個の輪状軟骨とが共通して観察されたが, スッポンにのみ披裂間軟骨が認められた。これらの各軟骨はいずれも硝子軟骨であった。

喉頭口の左右両縁に位置する披裂軟骨は尾側方で輪状軟骨と軟骨結合している。また鳥類で認められる小角軟骨は未発達であった。

輪状軟骨は喉頭の大部分を輪状に囲んでいたが, その背側部では一部に完全な融合の認められない部位があること, また気管軟骨と軟骨結合していることは鳥類のそれと異なる所見であった。各輪状軟骨は円筒を斜めに切った半管状を呈しているが, 披裂間軟骨が認められなかった種目では, 左右の披裂軟骨の間に位する軟骨の背側上縁が突出しており, 披裂間軟骨への分化を推測させる形態を呈していた。

ナマズの心臓における神経分布の組織学的検索

石原博子 (青学大・理工・生物)

Studies on the microscopic innervation of the
heart in the catfish

HIRKO ISHIHARA

演者の改良した鍍銀法を用い, ナマズの心臓における神経分布並に神経終末について組織学的に検索した結果を報告する。ナマズの心臓は動脈球, 心室・心房・静脈洞より成り, 心室は腹面に心房は少々背面に位し, 心臓壁は心外膜・心筋層・心内膜の3層に区別されている。心房の心外膜における神経繊維の発達は良好で心外膜に侵入した太い神経繊維束はこの層の結合組織内において自由な走行をなし, 更に分岐して神経叢の形成をなしている像を確認した。この太い神経繊維束は蛇行し, 所々に Schwann 氏鞘核を伴ない分岐・吻合を重ねることに依って徐々に微細なる神経網となって行くのが認められた。この Schwann 氏鞘核を伴った神経繊維束は血管域は毛細血管の走行に伴って走り, 時には横断, あるいは纏絡する像が多く認められた。1969年 A. Ábrahám は, *Cyprinus carpio* の心房のこの層で神経節細胞の存在を報告しているがナマズではこれを認めることが出来なかった, この層の神経終末は核に終るもの或は小嚢状を呈する終末を多く認めた。分岐に依り細くなった神経繊維束は血管或は毛細血管と共に心筋層に侵入し心筋層の表面を自由に走り更に微細となった神経繊維は心筋間結合組織中に毛細血管と共に侵入し核に終る終末を形成しているこの層内にも神経節細胞は認められなかった。心室におけるものも略々心房に類似するが, 心筋層の神経の発達は心房より劣っている。外膜結合組織中の神経繊維束中には太い好銀性繊維の混在を認めた。心外膜には知覚神経繊維を認めることが出来たが心筋層中にはこれを認めることが出来なかった。